利尻研究 Rishiri Studies (40): 45–50, March 2021

ペシ岬遺跡の遺物と年代について

山谷文人

〒097-0101　北海道利尻郡利尻富士町鴛泊字富士野　利尻富士町教育委員会

A Report on Remain and the Time at the Peshi-Misaki Site

Fumito YAMAYA

Rishirifuji Town Board of Education, Oshidomari, Rishiri Is., Hokkaido, 097-0101 Japan

Abstract. Three archaeological sites on the cape of Peshi, "Peshi-Misaki", the northern part of Rishiri Island, are reviewed. It seems that the Peshi-Misaki Site and the Oshidomari-Ko Site were used as the main sites of the Oshidomari area in the latter period of the Okhotsk culture based on the comparison with potteries excavated from the surrounding area. Because residence space and disposal space have not been found from the Peshi-Misaki Site and the Oshidomari-Ko Site respectively, further investigation is required for confirmation of the above hypothesis.

はじめに

鴛泊港周辺には，旧石器時代からオホーツク文化期にかけての遺跡が，各時期にわたり分布している．2009年に調査された利尻富士町役場遺跡では，続縄文時代末の鈴谷文化期からオホーツク文化後期の沈線文期にかけての住居や墓，廃棄場が発見され，当地で連綿と集落が営まれていたことがわかっている．

一方，ペシ岬周辺にも同時期の遺跡が分布しているが，一帯は，後世の削平や撹乱の影響が大きく，これまで断片的な調査記録しか残されていない．本稿では，その限られた資料や情報から，ペシ岬遺跡を中心に，遺物とその年代について考察する．

ペシ岬一帯の遺跡

ペシ岬一帯は，岬のふもとから中腹（現在，会津藩士墓碑が建つ広場）にかけて分布するペシ岬遺跡と鴛泊灯台周辺のペシ岬燈台遺跡，岬南側斜面に分布する鴛泊港遺跡の３遺跡が知られる（図１）．また，これまでの住民に対する聞き取りでは，ペシ岬でよく土器や矢じりを拾ったという情報はいくつも

図１．鴛泊地区の遺跡分布（webサイト「北の遺跡案内」より転載）．

写真１．明治末～大正初期の鴛泊港内．

あり，昔から遺跡があるという認識は高いといえる．なお，ペシ岬という名称は，アイヌ語の「シペシ」に由来し，その意味は「大きい崖」を表わす．また，かつては「モペシ（小さい崖）」とよばれる小山も存在していた（写真１）．

ペシ岬燈台遺跡においては，鈴谷文化期のまとまった資料が確認されており（岡田ほか，1984），灯台用地として利用される以前は，竪穴住居等がのこされていたものと考えられる．

鶯泊港遺跡では，オホーツク文化中期の刻文期から後期の貼付文期にかけての土器が，過去の採集により確認されている．昭和初期の段階で，貝塚（シジミ主体）がかつてあったが地ならしにより存在せず（名取，1933），1950 年の築港セメント倉庫建設の際に多数のオホーツク式土器が（新岡，1951），1969 年の鶯泊駅待合所新設工事の際には頭蓋骨が発見されたという（岡田ほか，1984）．

ペシ岬遺跡（図2）では，過去に中腹の広場が乾場などに利用され，原地形はとどめていない．また，ふもとにトンネルが作られた際，遺物が大量に出土したという（岡田ほか，1984）．このトンネルは，稚内の北防波堤ドーム築設の基礎に使用する石材確保が大きくかかわっており，このためモペシは消失し，今では跡地に「山神」という石碑が立つ．トンネルはすなわち，大正末期から昭和初期にかけて，モペシを爆破し採石したものを盤船に運び入れるため，トロッコのレールを港まで通すのに利用されたものである．

名取（1933）には，岬の中腹に２間（3.6m）に３間（5.4m）くらいの竪穴様の窪地があり，土石器を出すと報告されている．また，北海道大学には，1949 年に来島した児玉作左衛門が地元住民から収集した資料がのこされており，大場（1968）では「鶯泊遺跡」として，中沢・富塚（2017）では，地区ごとに大別され報告されている．筆者自身も 2014 年に北海道大学で当該資料を実見し，ラベルと遺物の整合性について調査した経緯があるので，以下に見解を示す．中沢・富塚の報文中，確実にペシ岬由来のものは，PLATE14 の擬縄貼付文の施されたミニチュア土器（P14-76），骨角製装飾品（P14-79），無文土器３点，PLATE5・8・9 すべてが，「梅谷君持参」のペシ岬由来の資料で，刻文，沈線文，摩擦式浮文が主である．PLATE10・11 の貼付文，擬縄貼付文についても，梅谷氏採集であることからペシ岬由来の可能性が高い．今回の報告遺物と比較するうえで図３のとおりその一部を掲載している．

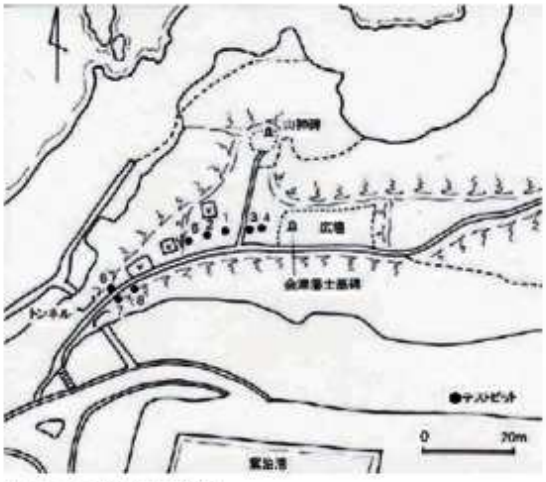

図２．ペシ岬遺跡周辺図．

写真２．ペシ岬遺跡調査（2005 年）．

写真３．ペシ岬遺跡テストピット６（2005 年）．

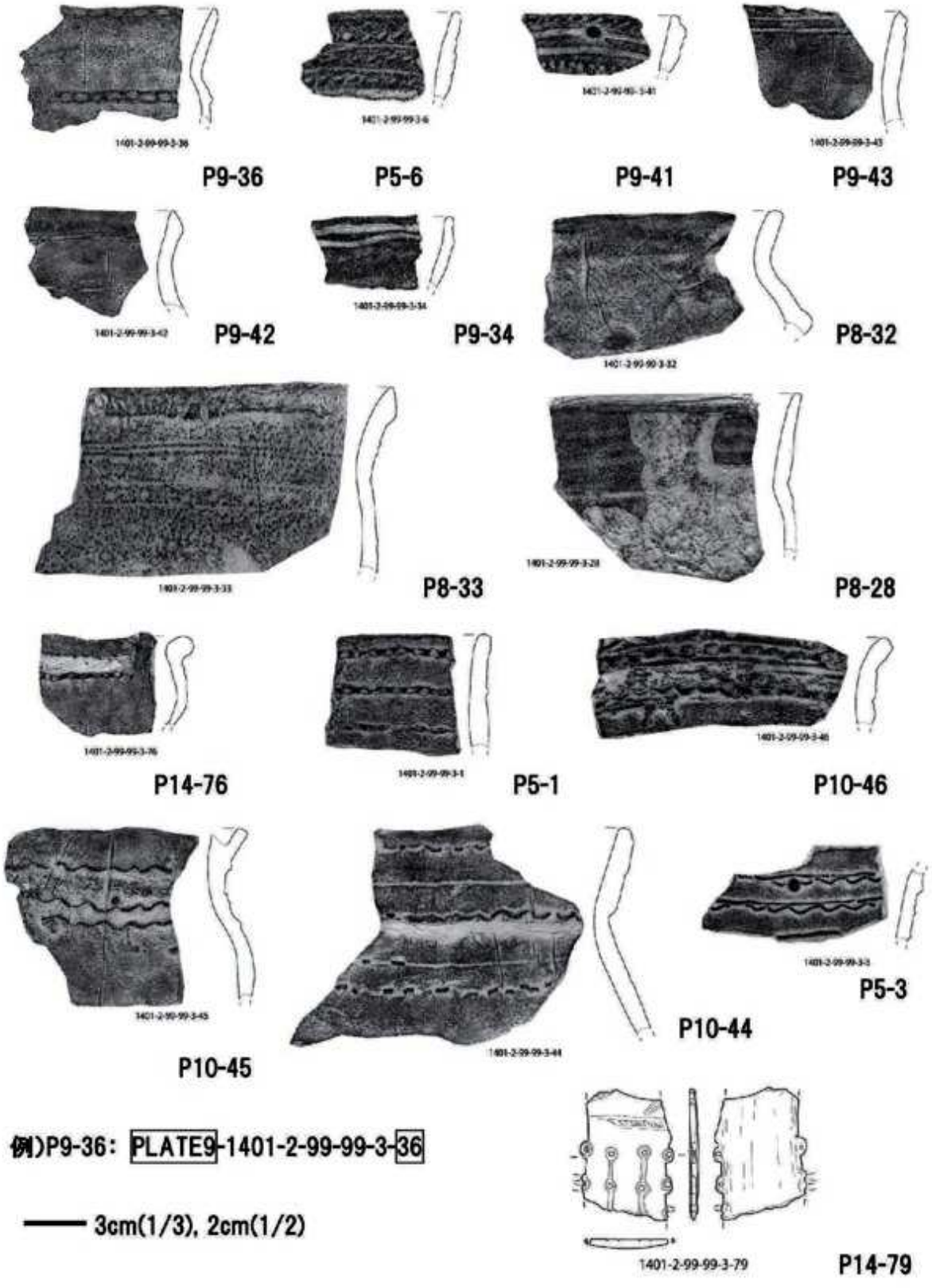

図3．北大所蔵のペシ岬遺跡採集遺物（土器：S=1/3，骨角器：S=1/2）．

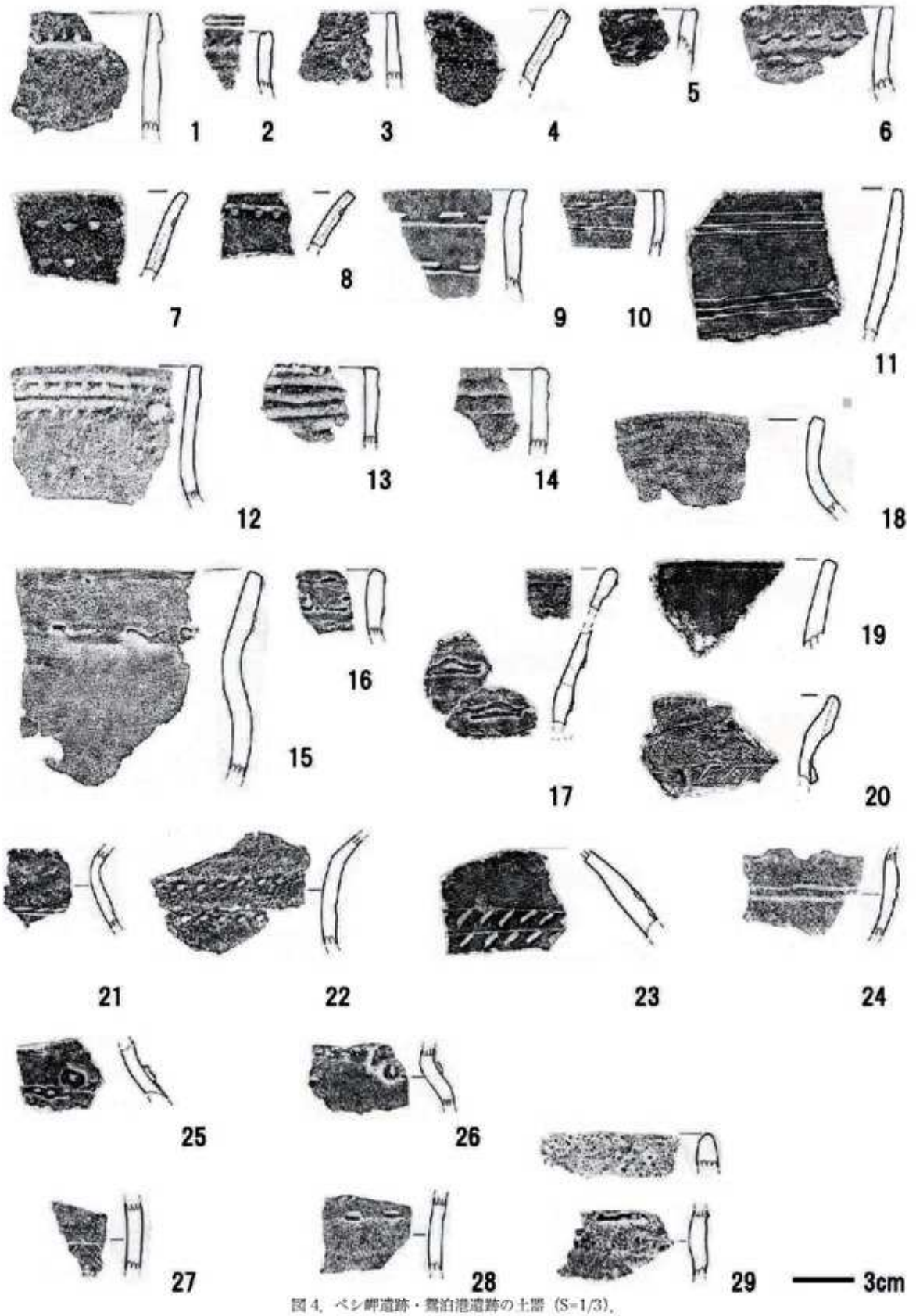

図4. ベシ岬遺跡・鷲泊港遺跡の土器（S=1/3）.

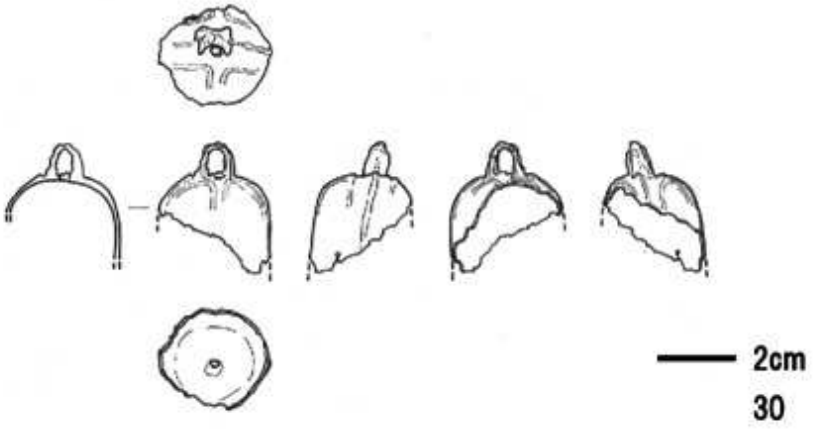

図5．ペシ岬遺跡採集の青銅製品 (S=1/2)．

2005年9月には，町教委による詳細分布調査を行ない，ペシ岬の遊歩道沿いにテストピットを8カ所設定した(図2，写真2・3)．残念ながら遺構は確認されず，少量のオホーツク式土器片と石鏃のみの出土にとどまっている．また，周辺の畑地についても，竪穴の可能性を含め表面踏査したが，遺物は得られていない．以下に，2005年の出土遺物と過去に採集され本町に保管されていた遺物について解説する．

遺物について（図4・5）

ペシ岬遺跡由来の土器片は，26点図示した．分類は，口縁部の文様による．1～7は刻文，8～10は刻文と沈線文の組合せ，11は3条1単位で施文された沈線文土器．12～14は摩擦式浮文で，12は刻文が組み合わされており，補修孔が穿たれている．15～17は，粘土紐の剥落がみられるが，2条1単位の貼付文が施文される．15はやや厚手，17は同一個体である．18～20は無文だが，20については頸部にボタン状の貼付文と刻文・沈線文が施される．21～22は頸部，23，25，26は肩部，24は胴部資料．

このうち2005年調査時のものは，5,16,18,21,24で，24のみテストピット6から出土している．ほか4点は，表採および草刈りの際に採集されたものである．石鏃は，3点出土し，テストピット6から1点，ほか2点は表採資料で，いずれも黒曜石

表1．鶯泊地区遺跡の年代変遷

年代区分	旧石器時代	縄文時代					続縄文時代		オホーツク文化期			
年代細分／遺跡名		早期	前期	中期	後期	晩期	前半	終末文化期	十和田期	刻文期	沈線文期	貼付文期
栄町キャンプ場遺跡	■											
利尻富士町役場遺跡		▒		▒	▒	■	▒	■	■	■	▒	
港町1遺跡				■								
港町2遺跡					▒							
栄町遺跡				▒	▒							
ペシ岬燈台遺跡								■				
ペシ岬遺跡								▒		▒	▒	▒
鴛泊港遺跡										▒	▒	▒
利尻神社下遺跡								▒				

■…住居など遺構がある（可能性含む）　▒…遺物のみ

製である．

9，26は，2003年に中腹の広場で採集されたもの．1～3，6，10，12～15，22は，採集年代不明ながら7月13日と明記されたもの．4，7，8，11，17，19，20，23，25は，採集年代不明である．

鶯泊港遺跡由来の土器片は，3点図示した．いずれも表採資料で，27，28は胴部，29は貼付文の同一個体．

30は，2005年にペシ岬遺跡の東端部で採集されたもので帰属時期は不明であるものの，以前に蛍光X線分析を行ない，主成分が銅Cuとスズ Sn，鉛Pbであったため，青銅に分類されている（山谷・小林，2019）．本製品は，欠損部分があり，出土品の全体像が把握できないため，鐸様としている．頂部に鈕がつき，肩は丸みを帯びている．身部の最大径は2.9cmで，横断面形は円形である．鈕からの長さ（残存部分長さ）は3.4cmで，下部は欠けている．装飾は，鈕から胴部にかけて，縦帯が周りめぐらされており，その縦帯を区切りにして両面に2つずつの区画帯で構成されている．身部上面の中央部には，舌を吊るすための直径約2mmの小孔が穿たれている．身部の厚さは約1mmである．鈕は，∩字状で，縦6mm，横4mmの紐穴をもつ．全体重量は9.3gであった．また，表面は緑青の摩耗により，茶褐色になっている部分がある．

まとめ

現在も過去もペシ岬は鶯泊湾を北寄りの風から守る役割を担ってきた．そして，当時存在していたモペシもまた，かつてペシ岬に分布していたであろう住居の防風的役割を担ったことは言うまでもない．

表1は，鶯泊地区に分布する各遺跡の年代変遷をまとめたものである．

遺跡の構築年代としては，利尻富士町役場遺跡側では，過去2回の発掘調査においても，貼付文土器の出土はないことから，この時期はペシ岬側に生活域や拠点を置いたと考えられる．また，ペシ岬遺跡と鶯泊港遺跡はそれぞれの遺物の年代が軌を一にしたものであることから，一体の遺跡として，前者が居住スペース，後者が廃棄スペースとみなすことが可能であろう．この確証を得るためには，ペシ岬に現存する竪穴の窪みの可能性がある畑地の調査と鶯泊港遺跡における貝塚の有無を見定める必要があると考えられる．

謝辞

2005年の詳細分布調査では，木山克彦，内山幸子，明神茉莉子，仲野ゆかり（当時，中京女子大）の諸氏に参加いただいている．そのほか，以下の方々より，種々ご教示，便宜いただいた．記して感謝申し上げたい．（敬称略）佐藤雅彦，中沢祐一

参考文献

熊木俊朗，2018．オホーツク海南岸地域古代土器の研究．北海道出版企画センター．321pp．

中沢祐一・富塚龍，2017．北海道大学所蔵利尻島収集考古資料．北海道大学．70pp．

名取武光，1933．利尻，礼文両島に於ける考古学的調査報告．史前学雑誌，5(3): 1–30．

新岡武彦，1951．鶯泊村ペシ岬東側の遺跡の概要．利礼郷土研究6号．利礼郷土研究同好会．

岡田淳子・宮塚義人・椙田光明・西谷栄治・椙田美枝子・塩野崎直子，1984．利尻島の埋蔵文化財(2)．利尻町立博物館年報，3: 9–50．

西谷榮治，1998．第二編　利尻島の先史文化．利尻富士町史：311–333．利尻富士町．

西谷榮治，2000．第一章　先史時代．利尻町史通史編：131–152．利尻町．

大場利夫，1968．北海道周辺地域に見られるオホーツク文化－Ⅱ礼文島・利尻島－．北方文化研究，3: 1–43．

利尻富士町教育委員会，1995．利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書．120pp．

山谷文人・小林淳哉，2019．利尻島ペシ岬遺跡採集の小鐸様青銅製品について．函館工業高等専門学校紀要，53: 133–137．

山谷文人・内山幸子・江田真毅・赤沼英男・高橋利彦・蔵元秀一・譜久嶺忠彦・石田肇，2011．利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書Ⅱ．利尻富士町教育委員会．304pp．